研究雑話(16)
自己実現としての職業選択：ワロン＝ランジュヴァン計画(一九四七)にみる戦後教育改革の理念。
E・セガン以降、大事なことといくつか(七)

藤井力夫

前回は、戦前の日本における一人の無名の実践家、浪速少年院院長小川恂蔵についてお話しました。「少年を商品視するな。」「自己陶酔を慎め。」「功を焦るな。他を排するな。」これが貧しく勉強できずに非行に陥った少年に対する小川の態度でした。「精神薄弱＝非行」とみなされ知能検査を試みはじめた時代に地に足をつけた実践を展開しようとしたのでした。私は戦前と戦後のつながりを理解するうえでもとても貴重な実践だと考えています。こうした地に足をつけた取り組みが戦後の教育改革の理念にどのように結実していったのか。今回は、「E・セガン以降大事なこと」の最終回として、最も民主的で人間的な教育改革だとされる「ワロン＝ランジュヴァン計画」(フランス、一九四七)をめぐってお話したいと思います。

E・セガン自身、一八八〇年、アメリカで教育制度全般についての改革方針を報告しています。とくに、幼児教育、初等教育の在り方について障害児教育の立場から全面展開しました。これは実物教授、母国語による教育、感覚教育の重視として、現在に受け継がれています。第二次世界大戦後の教育改革でも障害児教育関係者が大きな役割を演じました。とくに一九四七年のフランスの教育改革案におけるH・ワロンが典型です。日本では川本宇之介、城戸幡太郎をあげることができるでしょう。ワロンは心理学者として大変有名な人物ですが、略年譜にみるように一九一〇年代から二〇年代にかけてビセートル病院やヴァレー分院で障害児の治療に従事してきました。E・セガンが切り開き、D・M・ブルネヴィルが再開した同じ施設で研究したいわば3代目にあたる人物です。彼は言う。「障害児の発達のなかに人間の発達をみる。」人間たるゆえんとしての微笑みの発達、情動の発達について最も深く研究しました。私自身も認識発達における情動のトーニック成分(姿勢調節系)の役割についてはこのワロンから多くを学びました。

教育改革の基本原理は表Aの六点。具体的な教育階梯と障害児教育は、表B。「自己実現のための職業選択。」万人がこの利益を受けることができるような教育改革。ともすると忘れてしまう学校教育の本来の目的、職業選択の自由の実現。この点の追求に最大の特徴があります。これに至る背景はつぎの二点。

第一。ファシズムを許さない国民。一人の「英雄」に左右されない自らの考え。これを育て、主張できる国民。「教養に動的な意味をもたせる」(ランジュヴァン)。それぞれの得意とする専門的な技術の習得とともに、もとになる「国民教養」。なによりもこれが大事だとする。

第二。指導者層のための中等＝高等教育と庶民のための初等教育。いままでの教育は複線型であった。これからの教育は単線型。「統一学校」への改革。学校だけではない。一歩進めて、職業に貴賤があってはならない。万人が自分の能力を最大限に発揮できる職場と社会。自己実現できる職業選択。万人が実現できたとき「価値」による差はなくなる。人々は「関係」のなかで発達する。「人間の尊厳」が生きる。これぞ教育の課題。

なんと、楽天的であろうか。これが戦後教育改革の一つの理念であり、背景であった。「平等のなかにある多様性。」実生活のなかでの生活技術と生活文化。障害児もまさに「関係」のなかで発達できるとする。

(北海道教育大学助教授)

ワロン＝ランジュヴァン教育改革案(1947)

A．教育改革の基本原理
- ①　平等のなかにある多様性。正義の原則。
- ②　働く意志と能力の実現。職種差別の撤廃。
- ③　落ちこぼれを許さない。発達への権利。
- ④　自己実現の職場選択。職業指導の充実。
- ⑤　関係のもとに発達する。一般教養の充実。
- ⑥　卒業後も「充電」可。学校教育の開放。

B．教育階梯
- ・保育学校
- ・第1段教育(義務教育)
  - 第1期(7－11才)：自己の発見
  - 第2期(11－15才)：進路指導期
  - 第3期(15－18才)：方針決定期
    - 見習実務コース(実生活の技術と文化)
    - 職業教育コース(商業、工業、農業技術)
    - 理論教育コース(人文系、理系、工学系)
- ・第2段教育(高等教育)
  - 予備教育・大学前教育、高等教育
- ・特殊教育の充実
  - 促進教育(学業不振児)
  - 障害児教育(知能障害、感覚障害)
  - 感化教育(非行少年)
  - 補助教育(水上生活者等)

H. Wallon(1879-1962)略年譜

1879.6.15 パリで生まれる。
1899 高等師範学校入学。後、パリ大医学部。
1908 「迫害妄想、解釈の根底にある慢性的な妄想について」(サリペトリエール病院での臨床研究、医学博士)。その後、神経組織学教室助手として研究。
1925 「障害をもった子ども」(ビセートル病院、同ヴァレー分院にて研究、文学博士)。
1929 国立職業指導研究所教授。1937 コレージュ・ド・フランス教授。P．ランジュヴァン、H．ピエロンらと「新教育運動」を展開。
1942 ナチにより追放。1944 レジスタンス国民会議・国民教育事務局長。後、復職。教育改革国民委員会委員長。1947 教育改革案答申。